

KODAK  
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Centimetres

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



13  
3022  
6



3022  
6

河

小伝

花

富士 三國 夜物語 卷之六

東都 曲亭馬琴著編

第七編

赤間關の兩妓嫖客と誼支

浅間左門照行の浪路が蕩園であつてもその支の風流さるにせむ。その夜直に赤間関の長が家に到つて、うが子髪引く樓上このや。花のふきぎ。主の熟妓のやと、同じ照行答へて、さう今宵とめて来つるものな。と。熟妓のあや、あはれ名も浪路とせり、か阿弥陀寺へあはれを。外から見え、これいそぎのんぎを来つること、いかに髪をあらへ、早や樓上より、且して居多の菊燈臺に火と燈、銚子に盃を添つ、簪の唐物簪の枝のり、鮮けはと清き磁器に盛り、携出所せなすておれ



からべり浩野の塵に死の薫えかゝりて白き赤た衣うち籠衣する  
上は孔雀の尾よりもあかしの下う彩色なる楯箱の袷衣し遊行  
女もゆりの歩來て上座に着ぬ照行背向にあまを見よ浪路あり  
あゝその容止も二の町よりあつ何とてこの女の來つるからんと疑ひ  
ながら明白も回ひつねくち點つつらく見まも彼浪路あり似つ  
りあうもあゝく遊行女に盃を勧めてきづく酒をうけつ朗詠を  
あつらひといとあゝくあう哥ひ愛つる月ハ腫れさ入ましく沖の白帆も  
さやに見えしと春の餘波もをさるる色ど照行のあかあき覺へ  
酔を醒えそ軒檻の臂を持せ今宵の本意をいと思ひしうらるが餘  
つた堪くわく髪に對ひ蜜にりのまきまそめ大人びるもの逢

まやまの髪をわく行と馳せ老三板を櫂くまは照行忙しく  
廊のうへ退出彼老三板を呼てめあうけまの所まで浪路さの遊君と  
見これいと直とこと思ひて來つた髪が聞て入あやゆらん五思入  
なわあゝとむあまなまのうらとそ母のといつる故をそとひそめた  
向ハ老三板賑然とうち笑ひそ全く子ぎの聞のあまは侍りて  
浪江浪路と名くる君二人も侍るか浪江と姉と浪路と姉と  
定む今宵まわまの浪江の君さの嚮に花まが浪路に會へ宣ひし浪  
江と聞てあまをひのまがやと見侍りてさひつらそ浪江がやとの往て  
額を合せ耳を寄りあゝとあゝとあゝと又えの野へ立ちのてりあう花まの  
宣ひしを彼君によく聞え侍りてあ人さ人とあまがのあをいそらる

つと浪路に會せまわりのひまも偶見えゆつた一夜のそひやも  
 せくもろく追遣らるるらんもいと面み珠更浪路よ今宵客のあり  
 すめりきく一夜のひまげもろく方に宿ともうをらん聞えゆるとゆいと信  
 だらとゆい照行も指船の固辞お難く流まの身に寝辱をままらうを  
 ほのめ死つ物のと寂寥にんえろく老三板の命て照行と翠帳の  
 下に伴せ屋風建回とちのままろく出まろけり浪江の老三板がめろく  
 けくまろくこたまろく強顔国の思ひに岸の押の枝と遠く戦ぬ  
 風よりもそいよの睡る照行を呼覚とゆいさうとろくた世のこまろく  
 まひの偽を生平とする遊行女の身やのまろく一河の流まを及ぶまも  
 是他生の縁と聞縦浪路にゆいと来まもま違ひろく縁に一の

といもとまろくいよのまろく暮ひまらするむをわらうと商まろくまろく  
 と眼と會言葉と巧にとろくちけつあぞ照行もまひろくつその夜に  
 他まろく相語けるる程お照行のまろく浪路よ會まろくまの遺憶けれ  
 次の日も又長が許お詰お浪江をまろく出まろく房に詰おまろく  
 数待まろくまろくまろく照行其夜もまろくし黙止てまろく  
 まも寝にろく斯ろくひて不意も夜とろくねけまろく浪路よ遺らまろく  
 いわらねど浪江が志の又捨ろく死とろくまろくあつてまろくその事とゆいま出  
 らまろく浪路に又了髪が物がろくろく照行がまろくまろくまろく  
 浪江まろく折まろくひまろくまろく思ひつと照行のまろく客と  
 りまろくまろく惣にひろくけろく言葉實まろくまろく世の胡慮まろくまろく

さらさらたる思ひこゝしひく物如し袖の露湯とる身をに沸く  
る胸に火の燄を回らして熱しませし六月の上旬むとる星のひ  
ある夜のまじりし浪江の脱ぎに客をりきて其呼にゆきし照  
行甲夜より徒然あるまにひとり月光をきりて懐より笛をり音  
もなきるら吹らんと影も又よりるをりしりうるに神籠水  
中の吟ぐと雲を起するをりし江上の三弄赤壁の夢を雷を枕  
上の一声瑤臺の腸を断るるをりし時浪路のく間も隔るる笛の  
声とらぬ頃も照行の夏をきりしるは紫琴の操格としてさす  
合奏し聽く声らもびてうらまを聞け

とら人の ことりうねる おひ川 さらの身や

せれてい まの 浪間  
あの方の うろろ影  
あの方の うろろ影  
あの方の うろろ影  
あの方の うろろ影  
あの方の うろろ影

はうちりく加陵頻加の擧おとくゆと妙にうひむれ照行忽地  
にゆたけむる哥の思ひを述るる浪路の道を根らりと猜しよ  
の岸の船かきで繁ばりあらしり今さらあぐれば只いれ床  
に飾りたる螺蛸の書案よ阿武の松原と時後にこそ観管ありし  
忙し黒搦ながらの夏をきりて書つけてあそびと笛の裏に巻とち掌ニツ  
拍らむらむら髪走り来てこそ待ちびるひけぬ彼君呼て進らし  
るひり照行圓てるるは浪江の夏をきりし今彼野の琴を  
まにいら妙もの一定めて絃管の技何とぞとるくうと見君なる

とら人の ことりうねる おひ川 さらの身や



水

あまのふり日來再び笛の響けを待てて進みしに吹く見ゆと  
言傳せしつゝのたう髪をうらを得て是を受たり浪路が房にゆていた  
てより共まを聞えはく笛を遙きしと立ち入のぬ浪路の照行のひあり  
げある贈めくあれもその人の心とあはれしつゝ見るくら何となく心を  
よろこびて吹て見んとするに絶て音も出さぬ怪しやとて熟果を筒  
の裡に籠るる物わり漢使が馬の翼にくらを遠客が鯉の腹に寄せる  
故まに倣ひけるうと思ふにぞ叙思ひて掻き寄せが果して一編の玉章  
いと艶にらの程の懈浪江が縁由あらもく書きたとまかなぬ世を  
恨みろりぞぬど筆の運びも奇しく物せしと數回續記りあられは  
又まらうてうらも置まはば還答書きてめうらう髪にまうくひひ

含めて彼笛を返りけり照行の更ゆもまらぬもさびしきひり燈  
うら對し浪路が還答のうらとまら程に被了髪笛をりて來つ止むに  
のひてむく吹ゆのを見せゆるまうまうまうまうまうまうまうまうまう  
まをさかて風流士の耳にうつるまもあわねが返り進らするこのまやま  
為浪路の使つてさうらありゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
過ぎあらなるに浪江のいさよめく來ずる髪も腰助く物の黒白もまうま  
まの照行まが笛をうて筒の裏を見たら又艶筒を巻とめりつゝの竹の  
裡にこそくや姫のあはれまもまひひりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
くよろこび裳を褰足を翹浪路が房に潜行の浪路そのまを携て紅雨  
の中に伴ひ過り河笠庵寺のうらと候初に行のひまらまをを訪しを

のひー心程の程一一條わんこく待たせど世の中のとらぬとら端城  
も雲の為に隔らる幸すも雨を帯ての逢ふとらや君とえあひの有ら  
八重結る他へ女の目か夫がりのけあふも又妬しう思ひまへりて  
引る琴の音と笛の調が媒せし今宵のめをこそうま下けは幸は  
客も甲夜の程より入りて密に招き進らせよりの照行は只是仙女  
の窟に遊ぶらうとわがを浪江が頑物するもうらさけま下は君の  
面影の見まゆ一と今目まの詰来しど互にむけけと相語ら  
も紙格と引わけつと足音高く走りと来て二人が間に無半を坐する  
のを見まが浪江より照行大に狼狽して走ると退んとするを浪江も其  
裳を引ても浪路を見ゆりてあが涙とどろろが忽声あつて

やう煙花にても密丈の殊更の戒まるをいれよくとはま入てまわらふ  
かぞやとつと客を寃どて膳太も淫戯するもとあふま  
まも花まどうとらつと日來他人とらうの見まが誠なりて會は  
せしをいづとも竹と影護いあがや縦らうの故わの言言  
言替わらうと浪路とらつとまに來り家公よ訥聞えて汚れる  
顔を清うせん。とらまはれらつと徳せと浪路のさげの氣多  
はが宣ふとら理は似と理にあふ元の花主のらつと方へ來  
ひひいふ言ふひと幸にとらとを寃どらうのひひとらつと後  
を聞てもと幸來姉妹の契ともとらとらと見せし其のゆを  
一言もいひ諦てま顔にとらつとらつとらつとらつとらつとらつと

三國志

三



思ひぬぐもつ見ゆまはんぞうが如くあて在すまほしきことなり  
とらせすもぬ浪江のまほく声と高き一ふ口伶俐もひつらふ花  
まはるが客と一のやう證據やあつ又そのまほはるが客とて來な  
るまほの夜も聞えぬ今うく月と経日さうさねひつて  
こらひが方(來ぬうら)他(女)あはれならさうと言耻るあま浪路も今  
いそびうね互に抑の眉とあげ花の唇とひるさうと争ふはた傍輩の道  
君あはれ會合彼と寛めこまを寛る声のうらうらうけまはる老三板團  
るねとまはる來つ浪路とひつていひ懲りさう言てひまら夜もあげの家  
公に聞えて活き死一うらら目もさう浪江の花主を伴ひ行て即  
るうららに遊君さうさう叙わ(け)まはるが國に退き浪江のわらわら

照行を誘引てうらぬ浪路のひつて行未來一うを思ひたもせまはる心の  
一うらら千行の涙をせまう膝さうさうと面なると死んともひ定まつ  
眼のうらぐ書讀むがまはるひつて三ツの漏刺も更なるうらう  
西へ入る月もさう見ゆく刺刀取やうつに衝立んとする折も照  
行やうの潛來てこの形勢さうも驚き走りよと抱さぬあま浪路縦  
まはる追つてまはる一言も聞えぬとて死んともあひつる連も愛  
ひく會つてけまはるはるさう走らん為浪江が熟睡さうを窺ひ彼所  
と腹も來つてさうさうと行盤さう二條さうり結びさげ  
さうさうとめらさうに外回(あ)りさう浦回とさうて奔つてが折もさ  
あつたうらなれまほのさうさうのさう  
との曉の彼誰時追風に纜とさうて播磨へ赴く船のありさう照行船

人の金ありくやら船底に屈居てあやうく鰐の口とのびまじり夜も明  
 ざるに二三十里落延しつら浪路もやうやうむらむら明のくまに照  
 行が單衣の袖敷く血に染るるをためて見て大あやうくまじり其  
 故を問に照行答へて「まはるが一言の情にまじりまじりあひ行て斯  
 もせん者ともひひしと浪江をく猜しけん彼つちく睡らばまじりまじり  
 得ど刺とらせしと声ひとめぬ物ごうにぞ浪路忽地奥まで実語  
 虚言のいごあやう浪江が花街の意持をまじり他まじり笑しとあやう捨  
 て走らまじりの人より見は二道うらまじりまじりまじりまじり活路の  
 足をまじりまじりまじり刺殺せし何れぞ縦との人の妻とかなるとも  
 又他へ女にうらまじり殺しやせんうらまじり男子とあやうまじりまじり一生を誤

るらんと只管後悔すまじりまじり花街をうらまじりまじりあやうみらるは  
 前世うらの悪縁あらを思ひまじりまじり身まじりまじりまじりまじり赤  
 間関の長が家にその夜う照行が浪江を殺し浪路を將と奔し進  
 園宅沸がどく騒まじり居多の追人を蒐れど夜明けく後あやうを  
 ありまじりその往方あやうまじりあやう彼の日來何地に居るまじりまじり  
 楚とまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 営み累が此時よりまじりまじり浪路を眞勝負のもの却て浪江をいまじり  
 まじり浪路を憎まじり間話休題照行浪路が乗し船の追風に直帆揚  
 て走りまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
 けまじり照行船の浪路を残しまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり

うと物かうすは平馬國と驟然と立ち笑ひよ近曾長門お消息  
 きて内方さうび登すべくかひひにさづら來のよと幸多きと故ハ  
 ちの室津ハ西国渡海の要害とて赤松の家臣武備の居多の  
 士卒を領てとまを成るちうに此度とま不意との津の空正とけのり  
 たる東ハ完栗川とらたり西ハ赤穂の郡とらなり海陸の旅客等を改  
 正とめて身の務等縦富士太郎内方があつたを知らて寃よをも  
 ちの津のおうハ足踏もさすうすよりてまれ前日内方が為に鳩曾  
 巖の麓に便宜の隠家と修理したるが卯原も其所に在すといふ案内  
 すべしとやく赴き更といへば照行の口管との志の浅うらさを感謝し  
 ちてび浦方に行き浪路を伴ひ來つたまを平馬に引寄せ三人相伴

鳩曾巖に到卯原に逢く親子善たよとらとびあまは浪路も卯  
 原の名對面していと新々しくとあけりかくて日も暮れんとするた  
 平馬ハ又とと訪めといひておが穿宅へ入り照行の口管とせんそ端近  
 立のち口見まが口一のの高燈籠と捐出その委と出居の柱と撃た  
 せやくまが何の為ならんとあしと卯原の故と同一の卯原我子の耳  
 に口とをせるといひり富士太郎が人と相語て不意に押寄るまをわら  
 ん時たの委と断落して燈籠の火と消せば平馬とまと暗号に居多  
 の士卒と將と来つ若奴等を残らさず撃取んきの用意と出物  
 ぐるあぞ照行の口管との慮の浅うらさを稱けるが浪路にのちく  
 匿してすての夏を告すさまで浪路の遊行女に似ゆる婦の道を守

信く見えたるを卯原の曲まふひも  
せの日を経るまの物おぼく  
二雲叢を打て雙人に擬ま

第八回

富士太郎の故郷を去てより露に病り風に食むる時の万里の遠きを  
あが又ある時の千丈の險阻と起雙人行を索るも既に二手に  
及び四国九州残るも経歴すも時運のまじりたるや終  
に環會すも播磨路にのこるとして今茲明德四年の秋の季ハ  
山陽道にあらる真金も吉備の中山まで来にけりとの地方ハ備中  
備前との封疆も播磨ハ遠くは俄頃にはわたり  
かつて一足もすびまわらず忽地に目も腫れ消るも

路をたがへて意ひ絶え虫の咬むるに  
も六疫癘を見つけては里人亦忌怖  
多りの貪りの却て情深く馬を遣ひて世に  
主婦ありて富士太郎が旅や病を  
空室ありて掃ひ延布きして其野に病  
湯を運び病を来てふれど富士太郎の病日  
づも思ひ方に今宵の別を人の  
人の縁の奇しき夫婦が誠を  
けはるる津國の母や妻に一言の遺り

も六疫癘を見つけては里人亦忌怖  
多りの貪りの却て情深く馬を遣ひて世に  
主婦ありて富士太郎が旅や病を  
空室ありて掃ひ延布きして其野に病  
湯を運び病を来てふれど富士太郎の病日  
づも思ひ方に今宵の別を人の  
人の縁の奇しき夫婦が誠を  
けはるる津國の母や妻に一言の遺り

主の丈一個の旅人と馬に乗せ東の街へ過る。其家わたりなり。時  
靴の折るるをを見て大に驚き立ち待り鞍を置き進  
へ。彼所の家へ裡に憩ひ多き。馬を門に牽き旅  
人舟を下らる。搦頭に尻けく厩の方をよみ。病臥する人あり。  
その旅人々を食うと熟視する。其母あはれぬ。古主のけま  
うち尋ねて枕方に立ち。のり。郎君とて。病を返す。富  
士太郎も臥せり。その人を見。元家の奴隷なり。彼の父右門が撃  
と。夜雙入浅間を見。走り入り。富士太郎に従ひて合  
法御前。到り。主の死骸を昇りて来り。信守なる男  
は。富士太郎。黒江を引退く。日奴婢の身。服をとらせつる中

中。これにて。漆で遺物を。数多。一。く。程。かく。浴に。上。て。由緒  
ある人に。は。つと。聞。く。今。思。ひ。ま。は。げ。あ。は。れ。ま。の。ま。が。う。れ。と。  
苦。し。氣。に。頭。を。撞。つ。ひ。や。う。が。病。着。既。に。危。く。露。命。且。又。に。迫。り。汝。浴  
に。上。ら。ば。定。め。く。津。の。國。を。過。る。て。わ。が。つ。ら。が。家。に。立。上。り。て。櫻。子。に。言。傳。へ  
せ。し。只。の。う。た。つ。討。つ。と。死。す。る。ま。迷。ひ。の。一。つ。り。浴。の。富。士。も。曇。ら。ば。日。が  
志。を。嗣。せ。し。と。傳。へ。し。と。り。や。息。の。下。る。奴。隷。の。形。勢。を。見。て。只。願。嘆  
息。し。世。の。薄。命。多。う。人。い。は。ま。ど。斯。ま。で。果。報。あ。ら。ま。わ。ら。ば。僕。此。度。周  
防。の。山。口。使。せ。し。う。た。を。ま。が。う。の。子。淺。澤。へ。立。上。り。て。その。妻。を。告。げ。ま。へ。  
但。一。證。据。な。し。の。疑。や。あ。ら。し。一。筆。書。つ。け。る。と。り。の。富。士。太。郎。又。い。は。ま。  
病。刺。け。は。筆。と。る。妻。も。な。し。と。の。行。囊。の。裡。に。さ。の。の。掃。技。を。り。て



着に會もすまはて接子とてまを愁ひて。其思の更の対りて医療  
 省病むを竭し信ゆは勅り進らるる。浩河の十月の下旬元召仕  
 ぬる奴隷が周防より又三鷹をそん思ひもうけど訪ひ來り富士太郎が  
 吉備の中止のありて病危とよを告て彼掃枝を遊子し。ひひ  
 吉訖つとれれ〜く候〜。接子の絶も入るにたりの打むらたき  
 一惘然としてありけるが。かゆ心とまの三鷹が假寐するをば  
 覗に熟睡とくもむげや。もあ〜。其の志を願せや。  
 涙とる落して止んとするに止ま〜。翼あ〜。東の向よた〜。夫と見  
 まわ〜。けとど姑の病と存す。とま〜。又むら〜。せむ〜。せん〜  
 見と思ひを焦す折〜。三鷹がわ〜。り臥〜。りける。叔太郎驚て去

高きらむらら〜。身と抱む〜。三鷹も孫の泣声あ  
 覚けん。枕のあり〜。起出〜。接子泣き〜。見〜。はる〜。あ  
 去羊よりの物もひ〜。母にま〜。勝と〜。く〜。理〜。〜  
 も〜。女子程世〜。ひ〜。あ〜。照行〜。夫の仇は〜。あ  
 足手〜。三鷹〜。〜。三鷹が音  
 なく吾身も長〜。〜。〜。〜。〜。〜  
 め〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜  
 に秘〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜  
 悲〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜。〜

つ。抱子りあつるももくく。様子聞えとの太鼓の音多き。祖父  
 右京進知親やも思ひあつて身まろひ。まも撃たれ。身  
 只うらゝたの太鼓の音の敵入りの太鼓の音。身  
 土に埋じとも彼會誓の寛を雲や。越王の鼓より高く。思の名を揚ん  
 持る抱を剣と定め。責鼓おびその音も撃くと修羅の太鼓も  
 ちやぬわらあつちよ。抱投すていと亮然に見え。様子の折  
 ちを母に對し言やうけい。顔色もさうよび見え。おびら  
 今より住吉へ。連れたてり泉邊へ。妻を祈りける。一  
 宮居近く。妻に紛る。毎日にも得詣る。本意多く待  
 三雲より點頭くよ。もほほほ。ひん。きん。こり。う。れ。く。

様子の多子を抱き直に往吉へ。事請へて。ま。ぐ。を。め。は。の。姑。の。平。命。を。祈  
 又夫の命數限のわり。も。ら。う。ら。う。と。死。な。ら。ん。わ。ら。は。様。子。が。命  
 を。縮。め。く。の。病。難。を。救。ひ。も。一。心。に。祈。請。り。瑞。籬。の。か。り。より。行  
 つ。の。つ。百。度。の。歩。を。運。び。一。程。に。思。ひ。の。外。に。日。も。團。り。ま。と。姑。の。待。ち  
 び。の。ら。も。と。忙。し。く。走。り。ま。う。三。雲。の。屏。風。建。ま。り。て。再。び  
 即。ち。三。雲。の。自。害。と。鮮。血。塗。り。臥。し。て。噫。と。な。り。た。う。ら。敬。養。の。意。を  
 即。ち。撲。地。と。投。捨。空。に。骸。を。引。起。せ。喉。の。わ。り。を。短。刀。の。し。思。ひ。ま。た  
 割。断。し。ま。は。今。の。医。療。も。その。う。ひ。の。浅。ま。り。を。悲。し。く。思。ひ。道。と  
 涙。も。出。ま。さ。善。惡。も。ま。ご。り。け。る。ま。と。雄。々。と。女。子。も。ま。ご。り。け。る。



三國志 卷之六  
一 諫めし心も猛し三雲が枕方にゆりける一封の遺書をおひらきて  
讀み

富士太郎吉備の中山に病危と告來まはる行と息の内に  
あたまやうくおぼす支母をひら思ひにまじりまじり  
お身も志を空しくしり長と別且ともあはれ悔  
ひに申せぬ死因とららぬ伏すは是一ツはの思  
命あらんと禱り又一ツは身を後世をく彼所不遣ん  
すく養生の看病の善悪にようこり行くまを勤り  
あは併母が非命の死をす支も皆照行が故かまは彼  
ら父母の仇も只よく姓名を保り志を固して仇を報へ

富士太郎に言傳ゆる暇らるる浅間が首をくちし又小雪  
往方終にちまらず孫が生立をも見ずして死する支後世の障  
かろつべしうらうの母が後の支をの営み及すひそに脱出  
中山へ起さるる一日もたれあはるる不孝ならん  
支書にまはる様子のてうち泣くさて今朝も元の奴隷が支を  
告來一時熟睡しゆひつると思ひしあはれ聞く聞きておし  
親の子を思ふ支海も山も争くへんうらまを深き慈にあはれ  
傷の日を送らん却て孝をす深命一聽て三雲が死せし  
家に訴てその夜一心寺に葬り見送りの為にとて美弘より來り  
家臣に告てりか母もまのうらまも吾身一ツに推子を養へる萬  
目録 六



そまのつれ家傳へる大鼓のなづかあまを夫が帰るまで相公の  
宝藏にかりまじう思ひたるこの夏よく言をせりといへる人  
得坂に立ちりて演説するに美弘いと理なりとあらず結朝人を  
太鼓と城中にちり入らせりひけは接子今ふ安しと歎ひ難人  
夏漏んを厭て日かゆく方と人にあらず俄頃に行装をそめて  
太郎と脊に負ひ備中國と望立出ける心の中をいふるさしぬ  
なふ旅ハ物うたなひりるもの女孤客に稚子を携えれば艱難  
更にいへうもわらねどまにあんと思ひ誠心の一條は怖さ危すも  
高只管に走ると日を経く吉備の中山に下り着終ふその家  
尋行と聞ハ富士太郎の思ひの外病連ふとて播州へゆく立出

たまにむにわすれとていふまううそけきどり死せしと偽りあま  
てよく向究ふまて詭をいふあまをさらば播磨へまうらんとして  
元の路へ立ちりたあひ得ぬ夏の遺憾て来し時うら足もすまらず  
舟の船坂を經く播磨路に到り一日叡太郎痘瘡を病て全身に物  
うら出けるうらうらあまればさあぐてうら入すうて行と行程に播  
磨とのと聞つる夫の所在も定らざる只あまをと索ゆり一日  
室津の比る城山の麓に木とてうら楠あるを見くまが樹下に憩ひ  
ひらめたる石の上の落葉うたあまを叡太郎をうらうそ者畏飯り出  
て夕餐食をとするに叡太郎の遙向の岨に菊の花の色濃咲後まを  
見くあまをうらうらうらまをうらひより彼所へ歩を行とて

あま一技の折と後方を見えたるに今居たし右の上に日か思の見え  
まはるく驚き怪しく走りつゝとまはるく呼ぶとこのやうに  
其元來此地方ハ羊腸の山路と云はれと前後も見えりす徑又  
いすぢもあつたはるりつちへ行つらんと只顧疑ひ迷ひしごとく彼  
ハ遠くも隔を花も折る間を彼がくら走りてはたわすり狼の  
銜く高峯や登りけん鷲て鳥のの欄を碧空や翔けんとまはる  
る思ひぬらむつと浅ましく等乱物つらまきまむに索吟  
呻や初冬の晷傾き夕と夜行先も暗けし來るまはる行  
ずもあつた完栗川の西よりける黒崎の浦に出たりとのた夜も子の刺  
ささく身疲且勢ハ既に竭ぬまはるつと思ひしを江に繋ぎとる

海人の小舟に乗つとつり船前ちうあつた出又潜然と泣けるが且くして  
ひかりそも吾身むと薄命なるものあつた幼少ての落人とたりて  
紀の山里に世を潜び和泉はくハ野人の為に奪ひ去られ姉母老曾か  
生死をまはる又墨江はくハ男中と村主兵助を浅間に撃ち入る亦  
姑世を去つとつり遺言を空しくせしと遙く索來しものを夫の  
環會すつと見も往方まはるなりて何を便に存生人娑婆の苦難と  
脱まて死出の旅路に赴きまはるく憂はる勝らぬ弥陀佛の念する  
声も涙のいし口ももつと遂に水中に投んとする折しも船底より  
一個の旅人猛然とあつた出中も橋子惧せるといひもあつた拘死雷  
るを見りしハ夫富士太郎なりまはるつと夢なるうと驚馬つ又うれ

継の付よくと泣声もあはれなる。富士太郎も眼をまはさず泣きあがり。  
 吉備の中山あき死ねううに神仏のまご捨多りす。忽地に病  
 ちうけまじこの夏はあにきせまりく思ふのうら便宣りけ  
 まげ黙止うあつたにいとあつたるは内身がうへ今又ひよりごちる  
 と聞に母のわらうりひひりやうご思の往方まはすや。そく縁  
 由と聞んあうひひりやうと問ひる。い同ふりもる強顔さふ頭も  
 搦す。母の遺言うご思の夏涙の間は物ごとまはまはと聞も泣き  
 紅涙泉の涌るあうと熱傷ひらく死んせ甘がまどてうらうら胸を搦  
 母は横死しひひりご思も往方まはさる夏禰神の所為とあがり  
 且下子ひる儲る夏もあらん只歎くは母の夏なり。彼夏は

仇を討んと思ひて髪を引ひりて泣きあがり。照行が徒身室積平馬居  
 多の士卒を狩り室津にゆき。雙言人も彼所おとそと猜し。うら其計較に  
 乗らうと思ひ。明白にまはさる。磯にあり。夜に森野の跡を又ハ身を  
 和ら。まじりから護と安く撃んと思ひて。か今ひらう。まは堪す。夜  
 も明らひらうまに。あうまう。索めたり。まはさう。世にあらう。思を  
 もり復し。又照行と見る。うら。縦數百人の助太刀あり。握りらて  
 ちうけまじ。踏殺し。輒く宛と雪む。うら。歎きひひり。男  
 ままの一言に様子をひひり。うら。あひ。思を思つる。来し。を相語ぬ。  
 彼多田の神詔に死ん。後世にまんと教ひ。ま。又様子がうら。ま。

三國一夜物語卷之六終  
 高木興曾

